

写真＝明治24年度の野球部員たち

慶應義塾大学体育会野球部創部の歴史

新たなスポーツに挑んだ、慶應野球の原点

慶應義塾大学体育会野球部の歴史は、1888（明治21）年に始まった。慶應義塾体育会が創設された際、柔道、剣道、弓術、野球、端艇、水泳、兵式操練の七部門が設けられ、その一つとして野球部が誕生した。しかし、その起源はさらに古く、体育会創設以前から塾生の間で野球が行われ、青山英和学校などとの試合も行われていた。当時は野球そのものが日本に伝わって間もない時代であり、十分な用具や練習環境が整っているわけではなかった。

慶應義塾大学体育会野球部のはじまり

創生期には、山口大造、今井政太郎、松原良三、石田広治、藤田敏夫、平沼亮三らが中心となって活動した。体育会の一部として野球に取り組みながら、塾生たちは限られた環境の中で練習や試合を重ねていった。こうして慶應義塾大学における野球活動は少しずつ組織化され、その後の発展につながる土台が築かれていった。

本格的な活動への歩み

1897（明治30）年春、岩田伸太郎がアメリカから帰国し、ボールやミットなどの野球用具を持ち帰った。翌1898（明治31）年には、野球部が体育会の一部として組織を整え、新たな用具を購入しながら本格的な練習と対外試合を重ねるようになった。野球部の活動は次第に充実し、競技力の向上へとつながっていった。

アメリカ野球から学ぶ

当時の慶應義塾大学体育会野球部の発展を支えたのが、アメリカからもたらされた本場の野球である。アメリカで野球を経験した塾生や関係者から、投球、守備、走塁などの技術が伝えられ、選手たちは新しい練習方法を積極的に取り入れた。一方、ボールやグラブなどの用具は貴重で、壊れれば自分たちで修理しながら使い続けたという。

早慶戦、そして伝統へ

1903（明治36）年、慶應義塾大学は早稲田大学からの挑戦を受け、第1回早慶戦を行った。三田綱町グラウンドに約3000人の観客が集まり、試合は慶應義塾大学が11対9で勝利した。その後、両校は互いに競い合いながら、日本の学生野球を大きく発展させていく。現在まで続く慶應義塾野球の原点には、新しいスポーツに挑み、自ら工夫を重ねた先人たちの情熱があったのである。